九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

社会包摂デザイン・イニシアティブ2025年度活動報告

知足, 美加子
九州大学大学院芸術工学研究院

尾方, 義人
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

長津, 結一郎
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

中村, 美亜
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

https://doi.org/10.15017/7409225

出版情報：芸術工学研究. 41, pp.74-86, 2026-03-30. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

研究センター報告

社会包摂
デザイン・イニシアティブ
2025年度活動報告

Design Initiative for Diversity & Inclusion
社会包摂デザイン・イニシアティブ

Design Initiative for Diversity & Inclusion: 2025 Annual Report

社会包摂デザイン・イニシアティブは、2021年４月に「ソーシャルアートラボ」の取組を継承発展する後継組織として設置されました。特に2021～2023年度は「多様性のある包摂型社会の『しくみ』をデザインする先導的研究拠点の整備」事業として、幅広い活動を展開してきました。

2024年度からは、それまでの研究プロジェクトや授業を継承しつつ、発展させる取組を行っています。今年度は、主に授業に関する報告を掲載します。

研究プロジェクト

1. 災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践

授業

1. 社会包摂とデザインA
2. 社会包摂とデザインB
3. 社会包摂からマイクロクレデンシャルへ
4. 身体表現演習特講／文化事業マネジメント特論
5. スタジオプロジェクト Ⅰ-B、Ⅱ-B
6. スタジオプロジェクト Ⅲ-B、Ⅳ-B
7. 創造農村デザイン演習／創造農村デザイン応用演習
8. 社会と多様性

社会包摂デザイン・イニシアティブ（DIDI）

1. 理念

社会包摂とは、障害、性、国籍、貧困などの理由で社会から疎外されてきた人たちを含めた、あらゆる人たちの存在が尊重される社会のあり方を指す。このような包摂型の社会を実現するためには、従来とは異なる方法で、もの・こと・サービス・社会制度を「仕組み」としてデザインし、社会実装していくことが不可欠である。DIDIは、多様なニーズに応じたサービスを提供し、個人のポテンシャルを引き出すための「仕組み」をデザインすることで、健全な成長や、豊かさの新しい価値を生み出す社会づくりを先導する研究教育機関である。

*デザインは、日本では「色や形の工夫」と狭義に理解されることが多いが、元来「設計と計画」を意味し、思考の枠組みやコンセプトを設計・再設計しながら、もの・こと・サービス・社会制度などを創造・再創造する行為を指す。

2. ミッション

DIDIは、研究者どうしの連携を促進し、産学官民のハブとなるシンクタンクの役割を担う組織となることで、もの・こと・サービス・社会制度等から構成される地域社会のケアや雇用等の「仕組み」を、包摂型社会という新しい理念のもとで一体的にデザインし、それを適切に運用することを目指す。

そのため、DIDIでは、研究・教育・実践・提言の相互連関をつねに意識し活動を行っている。

- 研究：異なる分野の研究者どうしの連携を密にしながら、課題の背景にある「仕組み」にアプローチする研究を推進する。
- 教育：課題を生み出す「仕組み」を理解し、新しい視点から解決に導くデザイン提案ができる人材をさまざまな形で育成する。
- 実践：包摂型社会という新しい理念のもとで従来の「仕組み」を再デザインし、社会実装する。
- 提言：研究・教育・実践で得られた知見をもとに、包摂型社会を実現するためのデザイン提言を積極的に行う。

Project 1

災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践
ー文化継承の森づくりー

はじめに

近年、国土の約７割が森林を占める日本において、気候変動による豪雨や山火事等の災害による森林環境破壊が頻発している。特に九州北部の英彦山分水嶺領域は、復興半ばで繰り返される豪雨災害(2017年、2018年、2023年)が森林への不信感を生み、レジリエンスを低下させ離村率を高めている。本研究は、災害被災地の自然環境と人間の関係性再生につながる芸術文化的実践を試みるものである。復興支援において芸術文化の重要性は認識されつつも、実際にどのような心理的作用や貢献をもたらすのかは明確ではない。そこで、精神的価値として自然との繋がりを築き、災害後の森林再生および木に関する文化継承のメソッドを開発する。さらに、能動的に森林環境と人間との心理的関係性を繋ぎ直す契機に着目し、芸術文化的実践によって災害への関心や意識が変化するのかを検証する。2025年度は、朝倉三連水車群造り替えに必要な木材資源を土砂災害被災地で育成し、生物多様性と文化を育む森づくりを行う。また九州北部豪雨災害(2017年)の災害被災木を活用した楽器作りや演奏活動、木彫展鑑賞および災害を主題にした演劇活動などの芸術文化的実践に関する意識を調査する。本稿の構成は１.「三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり」プロジェクト(小石原川ダムコア山)。２. 台湾師範大学との災害被災木による楽器制作と演奏会。災害被災木の仏像奉納および復興支援としての彫刻展。西オーストラリア大学の演劇ワークショップの各取組みに関する分析。３. 検証となっている。

１. 三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくりプロジェクト（小石原川ダムコア山）

福岡県の朝倉市の三連水車１基と二連水車２基は、江戸時代の寛政元年(1789)から約230年間稼働する日本最古級の農業用木製水車である(図１)。水車群は「国指定史跡名勝天然記念物(1990年)」「疏水百選(2006年)」に選ばれている。三連水車は九州豪雨災害(2017年)から１ヶ月で稼働し「復興のシンボル」となった。躯体保全と技術継承のため５年毎に造り替えられてきたが、素材高騰に加え、マツ材線虫病蔓延によって中心軸に必要なアカマツの調達が困難な状況が続いている。そこで、水車を含む朝倉地区の文化継承に必要な木材を育成する「三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり(以下「文化継承の森」と略す)」プロジェクトとして、小石原川ダム横のコア山の一部で試験的な森づくりを行うこととなった。小石原川ダム(総貯水容量4,000万㎥)は英彦山を水源とする小石原川の水をたたえ、主に洪水調節を目的としたダムである。工事の際、ダムまわりを固めるコア(粘土質の土)を採取するため削った丘陵部をコア山と呼んでいる。2020年にコア山には環境影響評価法に基づく環境アセスメントによる大規模な植栽が試みられた。しかし栄養分のある表層土を失ったことにより植物の活着が進まず、小規模な土砂災害を繰り返すいわゆるガレ場となっている。2024年に水資源機構が作成した小石原川ダム定期報告書(p. 83)によるとコア山跡地の植栽率は８割だが、防獣ネット内の苗木の多くは枯死している状態である(図２)。



図１「朝倉三連水車」2025年



図２「小石原川ダムコア山」2025年

筆者はチコロナイ活動(アイヌ文化継承の森づくり)等のフィールドワーク[1]を通して、森林を観察し体験すること、および木を使うことで「森をデザイン」することの重要性に気づいた。また自然に関わる伝統文化や信仰における継続性や感情の共有が、コミュニティの再生に繋がることがわかった。このような経緯をふまえ、朝倉市、水資源機構および九州大学農学部教授・渡辺敦史[2]の協力のもと、コア山跡地の稗田地区に試験的に「文化継承の森づくり」を行うこととなった。植栽予定の樹木は、遺伝子撹乱がおこらないよう英彦山分水嶺の在来種としている。荒地に強いアカマツを最初に植えることは、森林遷移を鑑みても理にかなっている。英彦山や朝倉地区の在来種実生苗、球果、挿木枝を採取し植栽準備を進めている。

文化財のための森づくりの先行事例として、伊勢神宮の式年遷宮に必要な檜を育成する「神宮森林経営計画」(1923年)や、文化庁の「ふるさと文化財の森システム推進事業」(2006年)がある。森林遷移を想定した事例としては、林学者・本田静六らが明治神宮の杜づくりのため作成した『林苑計画書』(1915年)がある。本田は林相がアカマツ(針葉樹)から常緑広葉樹に遷移するよう杜をデザインし、全国から10万本の献木を集めた。実はこのアカマツは明治神宮造宮前から存在していたもので、アカマツ大径木が残る森の中心に御社殿を配置することが決められたという[3]。これらの事例の中に、「土砂災害被災地」に「森林遷移」を鑑みつ

1　知足美加子「災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践－文化継承の森づくり－」『芸術工学研究Vol. 40』2025年 pp. 60-63
2　森の設計に九州大学博士後期課程吉村知也、志水健一郎らの協力を得ている。
3　明治神宮とランドスケープ研究会『「林苑計画書」から読み解く明治神宮一〇〇年の森』東京都公園協会2020年 pp. 48-55



図３「発芽したアカマツ」
撮影：田中里佳



図４「コア山の地形模型」
出力：河内拓海



図５「制作されたカリンバ」
2025年



図６「カリンバ演奏風景」
2025年（実践A）

つ「遺伝子撹乱を起こさない地域由来の樹種」で文化継承の森をつくるというものは見当たらず、本プロジェクトの意義は高いと考えられる。

文化継承の森づくりの範囲および植栽のレイアウトを決めるため、九州大学関係者やデザイナーと共に「文化継承の森づくりデザインワークショップ（５/16、６/６）」を行った。最初の段階で植栽する樹種は、朝倉地区の文化に関わるアカマツ（朝倉水車群）、アラカシ（黒川高木神社の沓形餅の杵）、イチョウ（朝倉市シンボルの木のひとつ）である。現在、英彦山地区を中心に採取された球果や苗は、九州大学農学部圃場において育成中である（図３）。３D出力された地形模型等を用いて検討し（図４）、コア山向かって左上部の約500㎡を試験的森づくりの区域に設定した。地域由来の球果採取と実生苗の移植、挿し木技術などを用いて植栽を行う。その後、朝倉市と話し合った結果（６/30）、このデザイン案が概ね了承され、2026年２月22日に朝倉市と九州大学で植樹会を行うことが決まった。

本プロジェクトは、伝統文化継承という芸術的側面と復興支援的側面、木の遺伝子や森林遷移、土壌改良等の科学的側面を組み合わせて行われるものである。しかし、森を造成しただけでは市民との繋がりは生まれない。「森林の文化的コンセプト」や「その木がどこから来て、どこにいくのかという物語」を想像させるための仕組みとはどのようなものだろうか。次章では、森林と人間の関係性を再生するための芸術文化的実践の試みについて述べる。

２. 木に関わる芸術文化的実践と災害復興支援

（１）台湾師範大学との災害被災木による楽器制作と演奏会

2017 年の九州北部豪雨災害では、山地崩壊により約21万㎥の流木が発生した。発災後の被災地では自然環境、特に木に対して負の感情が向けられがちだった。本活動は「災害被災木をアートとして活かし、被災者の心を癒すとともに、災害記憶を伝承する」ことを目的としている。台湾師範大学美術学系と九州大学芸術工学部関係者が協力し、共鳴盤に災害被災木を用いた楽器（カリンバ）制作および演奏を通した復興支援を行った（５/23-25）。カリンバとは木の板に固定された金属のキーを親指で弾いて演奏する楽器である。交流会では、コロナ禍によって国際交流経験が少なかった学生達が各自の作品を紹介し合い親密さを増す場面が印象的だった。工作工房にて共鳴版成形、レーザー彫刻機での装飾、枕木等の接着、キー調律、演奏練習という手順で行った（図５）。その後、音響特殊棟録音スタジオにて久石譲《ナウシカ・レクイエム》（1984年）を演奏した（図６）[4]。専門的なスタジオでの演奏は、参加者に緊張と新鮮な喜びをもたらしていた。後述するアンケートの回答をみても、被災木に実際に手で触れたこと、および最後にひとつの曲を合奏したことが参加者に強い印象を刻んだことがうかがえる。

（２）被災木の木彫展示

【英彦山神宮への被災銘木の仏像奉納】

英彦山修験道は自然信仰を旨とし、山外への木の持出しを禁じる「九州彦山條々」（1600年）という法度が存在するほど樹木が崇敬されてきた。明治期の廃仏毀釈により仏教遺物は悉く破壊されたが、2016年より英彦山神宮を中心に神仏習合の山を復活させる動きが始まっている。筆者は英彦山銘木によって《鬼杉不動》等を制作する取組みで英彦山神宮に協力している。2025年、筆者は英彦山神宮の下津宮に《鬼杉不動》の脇侍となる《矜羯羅童子》《制吒迦童子》を奉納した。童子像は台風19号（1991年）の暴風によって落下した「鬼杉」（樹齢1300年）の枝、台座は「千本杉」の倒木を素材としている。ゲノム解析によって鬼杉は氷期前から存在する天然スギの貴重な遺伝子系統をもつ可能性が高いことがわかっている[5]。童子像台座の千本杉とは、標高標1,000m付近に山伏が植樹したという樹齢約300-450年の杉である[6]。被災した銘木による仏像制作には、木がもつ歴史や信仰のあり方を仏像の形をかりて伝えるという意図があった。奉納後、高千穂有昭禰宜が「開眼法要」を執り行い、被災木は信仰対象として生まれ変わっている（図７）。制作・奉納の様子がメディア（NHK）で取り上げられたこともあり、禰宜の話によると奉納後の参拝者は増加傾向にあるという。

【台湾との国際交流展「用手去看見世界」】

視覚障がいの有無をこえた鑑賞体験「手でみるプロジェクト−彫刻の視点から触れて鑑賞する」[7]の一環として、「用手去看見世界（ふれてみる展覧会）」（８/30-10/12）が435芸文特区と台湾中興大学（台湾）で開催された。彫刻（台日の視覚特別支援学校の生

4　映像はWebで公開されている。https://youtu.be/ptm5Fnszr2A?si=CqXi61WpcY9dySQb（2025年5月26日公開）
5　渡辺敦史「霧島神宮スギ御神木と英彦山神宮に残るスギ古木群の由来からみたスギ植栽に対する思想の相違」『山岳修験74』2024年pp. 73-88
6　製材を杉岡世邦（杉岡製材所）、台座成形を池上一則（大工池上算規）、持物制作を石上洋明（福岡教育大学講師）が担当している。
7　山梨大学准教授・武末裕子、435芸文特区レジデンス彫刻家・芝田典子が中心となった活動。

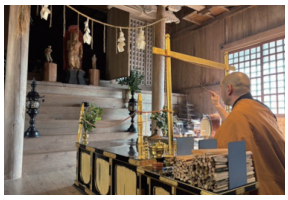


図７「童子像の開眼法要」2025年



図８「《捨身月兎》展示風景」2025年

徒作品を含む)だけでなく触れる絵本や裂き織りの楽器等が展示され、「触覚」を通じて鑑賞できる展覧会である。盲導犬による鑑賞会も行われた。筆者は、豪雨災害被災地を走り抜けた兎と仏教逸話をモチーフにした木彫《捨身月兎》(図８)を出品した。視覚に障害をもつ方にも疾走する野ウサギの動的な姿を感じてもらいたいと考えた。会場では鑑賞者が「美術品に触ること自体の喜び」を感得している様子がうかがえた。本展は台湾の複数メディア(「自由時報」「新唐人アジア太平洋テレビ」等)に取り上げられ、台湾社会からの関心を集める活動となった。

【被災木の彫刻展「ノアの方舟−生命と祈りの物語」】

豪雨災害被災地に隣接する旧甘木動物病院において、「ノアの方舟−生命と祈りの物語」(知足美加子彫刻展)[8]が開催された(11/２-11/９)。本展は故・長村泰三院長の追悼のために企画されており、閉院後の診療室や手術台等を用いたサイトスペシフィックな彫刻展である(図９)。展示作品の約半数は、九州北部豪雨災害(2017年)の災害流木を活用した木彫である。筆者が「苦難を受けた被災木が、人々から愛されるものとして新たな命を宿すこと」を願い制作したものである。後述するアンケートによると鑑賞者の約２割が被災経験か復興支援経験をもっていた。「被災した素材が温かい作品に変わることは、自らも被災した経験を何か温かいものに変えられる可能性を感じられた」という自由記述から、作品が被災者の心にポジティブな影響を与えたことがわかった。旧甘木動物病院側の予算の余剰は「福岡VMAT(災害時における動物救護派遣獣医療チーム)」に寄付されている。



図９「ノアの方舟展」2025年(実践B)

(３)災害主題の演劇“Zone of the Unsaid”制作と上演

西オーストラリア大学建築学科教授・Rosangela Tenorioは、日本の災害とデザインを学ぶ研修「Studio Japan 2025」を行った(11/７-11/26)。「日本における災害後の状況や人々への影響、および建築・デザイン・芸術がどのように癒しと復興に資するのか」を理解するためのものである。学生達はまず、アメリカ、ニュージーランド、日本各地の研究者の講義に参加した。筆者は「日本における伝統的森林崇敬と自然災害との関係」という講義を担い、九州大学助教・Martins Zarinsは演劇の講義とワークショップを担当した(図10)。西オーストラリア大学学生19人とTenorio教授は、東日本大震災、神戸大震災、能登半島地震の被災地や、復興住宅、伝統的木造建築技法等を調査した。最後の行程となる椎原町(高知県)は、面積の９割を森林が占めており、古くより林業や茅葺建築が盛んな町である。この町にある「ゆすはら座」(1948年)は和洋折衷様式の木造芝居小屋で、建築家・隈研吾が木造建築に取り組む契機をつくったといわれている。学生達は自然災害を主題にした演劇作品制作に取り組んだ。Zarins助教がディレクターをつとめ、ゆすはら座にて各作品をつなぎ“Zone of the Unsaid”として上演を行った。実際に災害遺構を目の当たりにした学生達の身体表現や発想の切り口、舞台美術、音響等は思慮深く独創的だった。前日の会場だった町立図書館より、ゆすはら座の方が参加者の集中度が高かったのは、伝統的木造建築がもつ雰囲気が彼らの創造性を刺激したためだと筆者は考えている。



図10「演劇活動風景」2025年(実践C)

３. 検証

美術家・川俣正(1953～)は、芸術の価値づけを担うのはつくる側ではなく、みる側、もしくは関わる側であるという[9]。創造行為、鑑賞、作品発表など芸術に対する関わり方は、社会問題への意識変化にどのような影響を与えるのだろうか。前章で紹介した活動について、九州北部豪雨災害の災害被災木を用いた楽器制作と演奏を芸術実践A、被災地で開催された災害被災木の彫刻展鑑賞を芸術実践B、災害を主題にした演劇制作と上演を芸術実践Cとし、災害への関心度の変化についてWeb上で主観評価を行った。

Wilcoxonの符号検定[10]を用いたところ、実践Aは有効回答数13(参加人数20人)n=11、T=０。実践Bは有効回答数49(参加人数253人)n=27、T=０。実践Cは有効回答数19(参加人数22人)n=８、T=０であった。危険率１％で有意差ありとなり、３つの活動において災害への関心が下がらなかったことが明らかになった。グラフ(図11)の分布のピークも活動後に高い方にシフトしている。

次に災害への関心度の変化を参加者別に調査したところ(図12)、関心度が高まった人数の割合はAが77%、Bが55%、Cが32%となった。Cの変化度が低いのは、参加者が制作直前に被災地の現地調査を行っており、既に災害への意識が高い状態にあったためだと考えられる。A(制作・演奏)とB(鑑賞)は共に災害被災

8　キュレーションはギャラリーコバコの秋重久美子によるもの。
9　川俣正『アートレス マイノリティとしての現代美術』フィルムアート社2001年pp.198-199
10　高木英行「使える！統計検定・機械学習:2群間の有意差検定」システム制御情報学会誌. 58 (8), 2014年pp.345-351

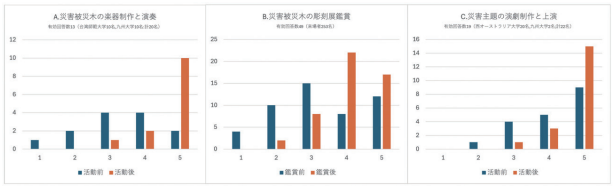


図11「芸術実践前後の災害への関心度の変化」2025年

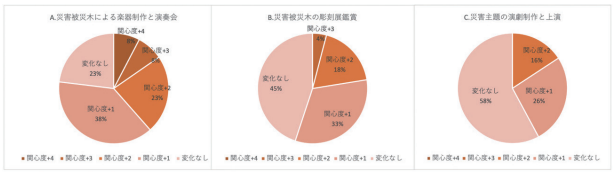


図12「芸術実践前後の災害への関心度の変化（参加者別）」2025年

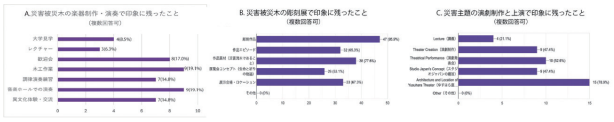


図13「芸術実践活動で印象に残ったこと（複数回答可）」2025年

木に関わる取り組みだったが、鑑賞経験より制作実践の方が災害への関心を高める効果が見受けられる。関心の変化の理由として、Aは「流木を自分の手に馴染むように加工する過程が（災害を）身近に感じさせる体験となった」、「（被災木を）使うことで木の辿った歴史に自然と思いを馳せた」、「手に触れて演奏し、朝倉の方に聞いていただいたから」などがあった。実際に「手で触れて制作・演奏したこと」がAの印象を強くしたと推測される。活動後の災害への関心の程度を最も高い５で評価した参加者の割合は、Aが85%、Bが35%、C が79%であった。活動が関心の度合いに与えた影響は、鑑賞体験Bより自ら創造しアウトプットした活動（AとC）の方に強くみられる。Cの演劇体験を経た参加者は「芸術は災害への人々の関心をより柔らかな方法で引きつけ教育の出発点となり、時間をかけて人々に静かに影響を与えていく」、「災害に関する多くの事実や情報を目にしてきたが、芸術と向き合うまではその影響力や緊急性に心から共感することはなかった」、「本当に教訓を得ようとするならば、多角的に振り返り人々と語り合う必要があると気づくことができた」など、芸術からの影響を認めている。興味深いのは、芸術実践が自分ごととして捉える気づきや、他者と共に多角的に理解する力を育成したことである。被災地で開催されたBの自由記述には「人は忘れているのではなく、記憶の断片が体内のあちこちに散りばめられている。アートはそういう普段は眠っている場所をノックしたり、柔らかく撫でたりしてくれる」「災害直後の関心が、忘れてはいけない事なのに年々うすれていく。このようなアート作品などによって再び災害について考えさせられる」という観賞後の記述があった。Bの鑑賞体験には内なる記憶を呼び起こす機会を与え、時間をかけて「能動的な受容」を促し、ネガティブなものを和らげ受容へと導く作用がうかがえる。

活動の中で印象に残ったこと（図13）についての調査では、筆者が予想していた以上に「表現を分かち合う機会と環境」が重要であることがわかった。Aは楽器制作と同程度に音響特殊棟録音スタジオにおける合奏体験が強い印象を残している。Cは（建築学科学生であることも一因だが）、約８割の参加者が創造活動より、上演会場の伝統的木造建築「ゆすはら座」が印象に残った回答している。

以上の検証から、木に関する芸術文化的実践は災害への関心や意識変化を促すこと、および「手で触れること」が能動的受容を高める傾向が確認された。それは木が辿ってきた歴史（由来や被災事実）や時間が、人間に「木を主体とした想像力」を与えるためだと筆者は考える。さらに表現を分かち合う機会と環境が、他者と共に多角的に理解する力を育成する機会として重要であることがわかった。

おわりに

本論では、災害後の森林環境と人間の関係性再生につながる芸術文化的実践を試み検証を行った。朝倉三連水車群造り替え等、地域の文化継承に必要な木材資源を土砂災害被災地で育成し、生物多様性と文化を育む森づくりを行うメソッドを探った。土壌に栄養分が少ない土砂災害被災地においては、「森林遷移」を鑑みて、荒地に強いアカマツ等を最初に植樹すること。落ち葉による土壌改良を進めながら広葉樹を植え、針広混交林へと遷移させていく方向性を見出した。また「遺伝子撹乱を起こさない地域由来の樹種」であることが重要であり、球果、実生苗、挿し木枝の採取場所に配慮する必要がある。育成された森林が地域文化の継承につながるという意識を市民と共有し能動的な維持管理に繋げるためには、木に関する芸術文化的実践が有効だという可能性が示された。実際に、災害被災木を活用した楽器作りや演奏活動、木彫展鑑賞、および自然災害を主題にした演劇活動などの芸術文化的実践および検証を行った。その結果、木に関する芸術文化的実践は災害への関心や意識変化を促すこと。内なる記憶を呼び起こす機会を与え、ネガティブなものを和らげる作用が見受けられた。さらに「手で触れること」が能動的受容を高める傾向が確認された。木が辿ってきた歴史や時間が人間に与える「木を主体とした想像力」が意識変化の契機となる。その想像力に働きかけるものとして芸術文化的実践が重要であることがわかった。今後の展開として、文化継承の森の物語をイメージさせる次世代への教育的実践方法の開発に取り組んでいきたい。

＊本研究は〈JSPS科研費24K00031〉の助成によるもの。なお本稿で紹介した活動の詳細は流域文化復興支援「MILL」（https://mill-triple.com/）で紹介している。



担当教員：
知足 美加子（ともたり みかこ）
九州大学大学院芸術工学研究院教授 博士（芸術学）／筑波大学大学院芸術研究科彫塑コース修了／青年海外協力隊美術隊員 コスタリカ共和国派遣／国画会彫刻部会員 日本山岳修験学会理事／自然とアートをテーマに復興支援活動等を行う

Course 1

社会包摂とデザインA
ー問題を構造に変換する授業ー

高度経済成長期においては、解決すべき問題は比較的明確でした。インフラ整備や産業振興のように、目標は数量化でき、進むべき方向も共有されていました。しかし現代社会では、プラスチック問題、認知症、色覚の多様性、ジェンダー、災害、SDGsなど、問題があることは広く認識されているにもかかわらず、何が本質的な課題なのかが見えにくくなっています。その理由は、多くの社会課題が制度、価値観、経済構造、身体特性、技術、表象などと複雑に絡み合い、単純な善悪や賛否では整理できない状態にあるからです。

社会包摂とデザインAは、こうした状況に対して「解決策」を提示する授業ではありません。本授業の目的は、問題を扱える形に変換することにあります。誰が標準として想定されているのか、排除はどのような制度設計から生まれているのか、正しさは誰の前提に立っているのか、どのような構造が見えないまま維持されているのかを問い直します。社会包摂を単なる配慮や優しさの概念としてではなく、制度分析と設計のための知的枠組みとして扱うことが本授業の核心です。

未来構想デザインコースの教員が、デザイン学、社会学、障害学、国際学、数学、生物学、芸術学といった異なる専門領域の立場から講義を行い、学生は各講義の背後にある問いの構造や分析方法を抽出します。知識を断片的に理解するのではなく、問題を構造として捉える力、感情論と構造論を切り分ける思考力、異分野の知を接続する抽象化能力を獲得することを目指します。社会包摂とデザインAは、社会課題に向き合うための「問いの基礎」を担う科目です。

社会包摂とデザインA

回	テーマ	担当講師
第１回	概要/ユニバーサルデザインとノーマライゼーション	尾方 義人
第２回	認知症の人の主体性を引き出すワークショップ	中村 美亜
第３回	アートと障害は似ている？　アートマネジメントの視点から考える包摂的社会に向けた仕組みづくり	長津 結一郎
第４回	脱人間中心主義と社会の仕組み	稲村 徳州
第５回	社会の仕組みを分析する	関 元秀
第６回	色覚の多様性と社会	平松 千尋
第７回	社会の多様性を表現することとは	港 岳彦
第８回	地域から浮かぶ風景とその残し方	横谷 奈歩

今年度の活動







Course 2

社会包摂とデザインB
ー構造が現場でどのように現れるかー

社会包摂とデザインBは、Aで培った構造的視点を実社会の具体的文脈の中で検証する科目です。冤罪、ジェンダーと広告、里親制度、社会福祉、ボランティア、インクルーシブデザインなど、現実の制度や実践を題材に、社会包摂がどのように機能し、またどこで摩擦や矛盾を生んでいるのかを考察します。本科目は、単に現場の事例を学ぶ場ではなく、構造がどのように制度運用やメディア表象、社会的実践として具体化されるのかを読み解く場です。

Aが抽象化と分析を担うのに対し、Bは具体化と検証を担います。Aで明らかになった排除や標準の構造は、現場ではどのように現れ、どのような人にどのような影響を与えているのかを考えます。理念はどこで歪み、制度はどの段階で硬直化し、誰がリスクや負担を引き受けているのかを具体的事例から検証します。これにより、社会包摂を理念のレベルに留めず、実践可能な設計課題として捉える視点を養います。

社会包摂とデザインBは、Aで形成された構造理解を実社会に接続する科目です。抽象的理解を現場の複雑性の中で揺さぶり、単純化できない現実を前にしても思考を停止しない態度を育てます。AとBは分断された授業ではなく、構造と現場を往復する一連の学修設計として構成されています。

社会包摂とデザインB

回	テーマ	担当講師
第１回	ガイダンス/公共とデザイン	尾方 義人
第２回	冤罪	映画監督　砂入 博史先生
第３回	ジェンダーと広告	写真家　小林 美香先生
第４回	インクルーシブデザイン	羽野 暁
第５回	ボランティア	東北学院大学　齊藤 康則先生
第６回	里親制度	田北 雅裕
第７回	社会福祉	立教大学　小野田 由美子先生
第８回	社会資源と公共	尾方 義人

	社会包摂とデザインA履修登録数	社会包摂とデザインA履修登録率	社会包摂とデザインB履修登録数	社会包摂とデザインB履修登録率
共創学部	54	51%	51	49%
文学部	40	26%	36	24%
教育学部	3	7%	3	7%
法学部	36	19%	32	17%
経済学部	69	31%	56	25%
理学部	12	5%	10	4%
医学部	10	4%	9	4%
歯学部	0	0%	0	0%
薬学部	1	1%	1	1%
工学部	205	26%	201	26%
芸術工学部	121	65%	115	61%
農学部	45	20%	33	15%
合計	454	22%	424	21%

Course
3

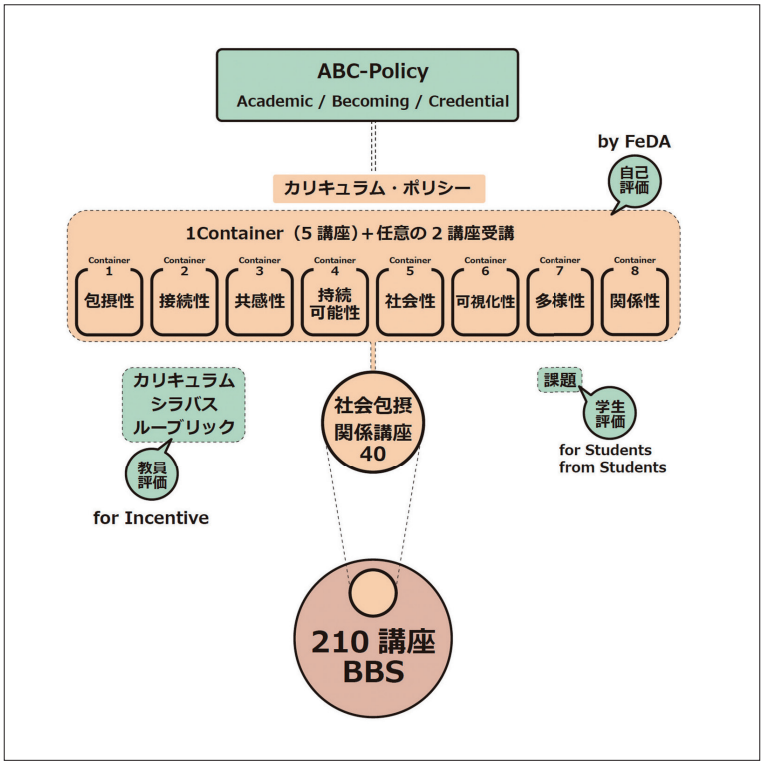
社会包摂からマイクロクレデンシャルへ
ー授業を持続的な問いの回路へー

社会包摂とデザインAとBは、構造を見る力と現場を見る視点を育成しますが、それだけでは知識は一過性の理解にとどまります。重要なのは、そこで得た視点を自分自身の問いへと変換し、持続的に思考し続けることです。そのための拡張装置がFeDAおよび学内授業外リソースです。

FeDAは、授業で獲得した構造理解と現場認識を再編集し、個々の関心や専門領域と接続するための教育設計プラットフォームです。アナロジー型マイクロクレデンシャルやアジャイル型AIカリキュラムなどを通じて、学生は自らの問いを再構成し、小さな実験や設計に展開します。ここでは、Aでの抽象的理解とBでの具体的知見が再統合され、学修が個人の思考回路として内在化されます。

学内授業外リソースは、評価や単位取得から切り離された少人数の対話空間として機能します。学生や教員が未完成の問いを持ち寄り、構造と現場の往復を継続する場です。授業外での自由な対話により、思考の試行錯誤や問いの更新が可能になります。Aが基礎工事、Bが現場検証であるとすれば、FeDAと学内授業外リソースは思考を持続させる循環装置です。

この三層構造により、社会包摂は理念やスローガンではなく、分析可能で設計可能な対象として扱われます。AとBは起点であり、FeDAと学内授業外リソースは問いを持続させる回路です。授業を終点とせず、学内外の資源を接続しながら、社会課題に対する構造的思考を継続する教育モデルを形成します。





担当教員:
尾方 義人（おがた よしと）
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門教授。
大きな会社で働いたあと、小さなデザイン事務所で修行して、大学で働き始めました。とにかくずっとデザインしています。
神戸 福岡 東京 名古屋 岡山 大阪 福岡とあちこちで暮らしましたが、今では福岡での生活が１番長くなりました。けれども、関西弁はぬけません。

Course 4

身体表現演習特講〈学部〉
文化事業マネジメント特論〈学府〉

担 当 教 員:長津 結一郎
学 外 ゲ ス ト:菅原 直樹、中村 路子

対話的な演劇の鑑賞体験を構成し、社会的な課題を考える機会を提供する。このことは文化政策を考える上で重要な課題だと言えます。そこで、福岡県久留米市にある久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」に参画する授業を実施しました。学外から参加した大学生らとともに、「老いと演劇」OiBokkeShi の演劇「恋はみずいろ」を鑑賞し、対話をするプログラムでした。イントロダクションでは、参加者が自己紹介や「家族」をテーマに議論し、多様な価値観を共有しました。続くプレレクチャーでは、さまざまな家族のあり方を提唱するゲスト講演の話に耳を傾け、あるべき「家族」の未来像について考える時間を持ちました。岡山県奈義町に住むさまざまな家族が、特別養護老人ホームを舞台に繰り広げる演劇を通して、家族の境界線や血縁関係だけではない心理的な家族関係が、少子高齢化という社会課題にどう関係していくのか考えさせられる機会となりました。

回	テーマ	担当講師
1	イントロダクション	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
2・3	プレレクチャー 「劇場で考える〜これからの家族〜」	菅原 直樹(劇作家、演出家、俳優、介護福祉士) 中村 路子(一般社団法人umau. 代表) 長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
4・5・6	「恋はみずいろ」鑑賞と対話	菅原 直樹(演出家) 長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
7・8	鑑賞体験の振り返り、鑑賞をデザインする	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者:芸術工学部・大学院芸術工学府全専攻　**受講人数**:16名　**日程**:2025年春学期　**連携**:久留米シティプラザ



久留米シティプラザ連携



担当教員:
長津 結一郎
(ながつ ゆういちろう)
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門准教授、博士(学術・東京藝術大学)。専門はアーツマネジメント、文化政策。芸術活動を通じて新たな関係性が生まれる場に伴走/伴奏しながら、研究や実践活動を行う。著書に『舞台の上の障害者 境界から生まれる表現』(単著。九州大学出版会、2018年)など。

Course 5

スタジオプロジェクトⅠ-B、Ⅱ-B「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」〈学府〉

担 当 教 員：尾本 章、長津 結一郎、曽村 みずき
学 外 ゲ ス ト：岩田 桃楠、瀧北 榮山、阿部 健一、齋藤 優衣
アシスタント：眞﨑 一美（九州大学大学院芸術工学府テクニカルスタッフ）、久田 芙実（九州大学芸術工学部事務補佐員）

本学府では、さまざまなコースの学生が課題解決にむけて集まる科目「スタジオプロジェクト」を開講しています。2025年度開講のスタジオプロジェクト科目の一つ「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」前期では、近年劇場における情報保障などを通じた福祉的な配慮を行ったコンサートの機会が増加していることを受けて、音響工学と福祉が融合したコンサートにおける情報保障のあり方を学生主体で考案しました。始めに「障害」や「技術と社会包摂」について知見を深め、音響福祉工学に関する文献調査やコンサートにおけるアクセシビリティのあり方を提案。実際に和楽器のコンサートを実施し、ホール内で行われている演奏を「音場再生技術」を用いて、リラックスしながら過ごすことができる部屋で再現したり、能楽堂の音の響きで再現したりしました。ホール内での鑑賞が難しい人のことを考え、部屋の照明や設えなども工夫し、音環境が劣化することなくコンサートを楽しめる空間づくりの実践となりました。また、ホール内では歌詞や曲のイメージ画像を投影したり、別室で好みの音質の違いを共有する企画も開催しました。今回学生が考えたコンサートのタイトルは「芸（わざ）と、技（わざ）と、～和楽器奏者と体験する音響技術～」。和楽器奏者の芸の技と音響福祉工学の技術が融合したアクセシビリティの提案となりました。

回		テーマ	担当講師
Ⅰ-B	1	ガイダンス、レクチャー 「劇場アクセシビリティについて」	長津 結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院）
	2	レクチャー、体験 「音響福祉工学について」	尾本 章（九州大学大学院芸術工学研究院）
	3	文献調査	尾本 章、長津 結一郎
	4・5・6	グループでの企画考案	尾本 章、長津 結一郎
	7・8	企画発表、講評、企画書の作成	尾本 章、長津 結一郎、阿部 健一（ドラマトゥルク／地域計画研究）、齋藤 優衣（パフォーマー／保育者）
Ⅱ-B	9～14	コンサート運営のための実務 （グループに分かれて作業）	尾本 章、長津 結一郎、曽村 みずき（九州大学大学院芸術工学研究院／鶴田流琵琶奏者）
	15	本番	岩田 桃楠（津軽三味線奏者）、瀧北 榮山（尺八奏者）、尾本 章、長津 結一郎、曽村 みずき
	16	振り返り	尾本 章、長津 結一郎、曽村 みずき

対象者：芸術工学部・大学院芸術工学府全専攻　**受講人数**：Ⅰ-B＝22名、Ⅱ-B＝19名　**日程**：2025年前期　**後援**：福岡市
助成：科学研究費補助金 JP24K03222、「音場再生システムの総合的な性能向上および人の福祉への適用に関する研究」


演奏者の技が見えるように手元を映している様子


音の響きを自分の好みに変えながら体験できるワークショップの様子


音環境が整ったリラックス空間の提供の様子

撮影：富永 亜紀子



担当教員：
尾本 章（おもと あきら）
九州大学大学院芸術工学研究院音響設計部門教授、博士（工学）。専門は応用音響工学。様々な音場の計測・評価・制御・再現などを通して、最終的に良い音にたどり着く研究を目指している。



担当教員：
曽村 みずき（そむら みずき）
九州大学大学院芸術工学研究院音響設計部門助教、博士（音楽学・東京藝術大学）。薩摩琵琶を中心とした近代琵琶楽の研究に携わる一方で、演奏活動にも取り組む。鶴田流琵琶を熊田かほり氏に師事。令和6・7年度第60・61回琵琶楽コンクール秀位入賞。

担当教員：
長津 結一郎（ながつ ゆういちろう）→ P82参照

Course 6

スタジオプロジェクトⅢ-B、Ⅳ-B 「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」

担 当 教 員:尾本 章、長津 結一郎、Sasa-Marie
学 内 ゲ ス ト:槇原 彩
学 外 ゲ ス ト:河合 拓始、鈴木 玲雄、野上 まり、鈴木 久晴、仁比 峻輔、渡壁 航平、金箱 淳一、渡邊 梨乃・穐田 誠・久住呂 文華(福岡県聴覚障害者協会青年部)
アシスタント:眞﨑 一美(九州大学大学院芸術工学府テクニカルスタッフ)、久田 芙実(九州大学芸術工学部事務補佐員)

前期科目、「スタジオプロジェクトⅠ-B、Ⅱ-B」の後期科目として、本学府では、さまざまなコースの学生が課題解決にむけて集まる科目「スタジオプロジェクトⅢ-B、Ⅳ-B　ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」を開講しています。後期では、近年劇場における情報保障などを通じた福祉的な配慮を行ったコンサートが増加していることを受けて、音響工学や音楽、メディアデザイン等を専門とする大学院生が中心となり、さまざまなきこえかたの人たちが音楽の感覚をどのように共有することができるかをテーマとしました。作曲家やサイン・ポエット、聴覚に障害がある方々をゲスト講師に迎え小さな作品を創作し、公開講座形式でコンサート「音ガクってなんだろう？〜みんなおんがくがわからんけん〜」を実施しました。コンサートでは、授業のプロセスで制作されたパフォーマンスを披露するとともに、そのプロセスで何を考え、聴覚障害と音楽の関係を考えるうえで必要なことは何かを提案し、音をめぐる新しい表現のあり方をディスカッションしました。

回		テーマ	担当講師
Ⅲ-B	1〜4	ガイダンス、集中創作	河合　拓始(作曲家、ピアニスト)、鈴木　玲雄(福岡ろう劇団博多)、Sasa-Marie(サイン・ポエット)、福岡県聴覚障害者協会青年部、尾本　章、長津　結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	5	テクノロジーからのアプローチ	鈴木 久晴・仁比 峻輔・渡壁 航平(エヴィクサー株式会社)
	6	共遊楽器の創作からのアプローチ	金箱 淳一(楽器インターフェース研究者、神戸芸術工科大学)
	7	事業評価の観点から考えるコンサートマネジメント	槇原 彩(九州大学大学院芸術工学研究院)
	8〜13	創作	担当講師:河合　拓始(作曲家、ピアニスト)、鈴木　玲雄、野上　まり(福岡ろう劇団博多)、Sasa-Marie(サイン・ポエット)、福岡県聴覚障害者協会青年部、尾本　章、長津　結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
Ⅳ-B	14	リハーサル	担当講師:河合　拓始(作曲家、ピアニスト)、鈴木　玲雄、野上　まり(福岡ろう劇団博多)、Sasa-Marie(サイン・ポエット)、福岡県聴覚障害者協会青年部、尾本　章、長津　結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	15	本番	担当講師:河合　拓始(作曲家、ピアニスト)、鈴木　玲雄、野上　まり(福岡ろう劇団博多)、Sasa-Marie(サイン・ポエット)、福岡県聴覚障害者協会青年部、尾本　章、長津　結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	16	振り返り	尾本 章、長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者:芸術工学部・大学院芸術工学府全専攻　**受講人数**:Ⅲ-B 8名、Ⅳ-B 8名　**日程**:2025年後期
共催:社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会青年部　**協力**:福岡ろう劇団博多、キコエナイ×キコエル発展事業委員会
後援:福岡市、社会福祉法人福岡県聴覚障害者協会　**助成**:一般財団法人曽田豊二記念財団、科学研究費補助金JP24K03222、JP23K17491


作品創作の様子


共遊楽器を体験している様子


事業評価の観点からこれまでの授業の振り返り



担当教員:
Sasa-Marie(ささ・まりー)
Sign Poet(手話の「てことば」で詩を紡ぐ人)、Signed Musician(手話をベースにサイレントなおんがくを奏でる人)てことば、からだ、こえ、おんがくなど五感で感じる立体的な詩の空間を構築するライブを展開。音楽のアクセシビリティをテーマに、九州大学大学院芸術工学府博士後期課程在学中。

担当教員:
尾本 章(おもと あきら)
→ P83参照
担当教員:
長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)
→ P82参照

Course 7

創造農村デザイン演習〈学部〉
創造農村デザイン応用演習〈学府〉

担 当 教 員:朝廣 和夫、長津 結一郎、野村 久子
学外ゲスト:MUGAMBI Munene Mutuma、TRIMCHE Omar、小森 耕太、武田 力、石田 絵里香
ス タ ッ フ:BENSAIDA Khaoula、芹澤 覚子、眞﨑 一美
ティーチング・アシスタント:宮嵜 陽大
協力:J-MENA Project、九州大学国際戦略企画室

中山間地域などの農村社会には、豊かな自然や長年にわたり育まれてきた地域文化がある一方で、少子高齢化や過疎化など多くの課題が存在しています。こうした状況を踏まえ、農とアートのあるライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりを実践しているエリアを対象に、学生が主体的に農村の自然や文化、その特性や課題に触れ、包摂的社会の具体的な取り組みのあり方について学ぶ臨時授業科目として開設しました。本科目は、2022年度より農学研究院と連携して実施しており、今年度は国の事業として実施されている国際交流事業さくらサイエンスプログラム(https://ssp.jst.go.jp/)の一環としても実施しました。総じて、本科目は学部横断・文化横断・専門横断が成立している九州大学の中でも特にユニークな教育実践であると言えます。

合宿は３日間にわたって行われ、多彩な活動を通じて地域と深く関わる機会となりました。１日目は、地域で毎年行われているイベント「唄って踊って味わう八女茶山」に全員で参加しました。地域で歌い継がれている茶山唄と、2019年のソーシャルアートラボのプロジェクトで制作された踊りを地域住民の皆さんとともに披露し、お茶にまつわるお話なども伺いながら、地域の文化を体感しました。２日目は、午前中に林業体験として、竹林の整備作業に挑戦し、山林と人との共存の重要性について理解を深めました。午後は、武田力さんのアートワークショップに参加し、「エターナル・コール」という作品を制作しました。作品制作は、散歩をしながら気になる場所を選び、その場所から想起されるストーリーを録音し、写真とともに地図にマッピングするという手法が用いられました。参加者は空き家や川、棚田など思い思いの場所で個性豊かな作品をつくりあげました。最終日は、制作した作品の場所をそれぞれのペースで巡り、鑑賞しました。こうした自然とともに暮らすために必要な作業と芸術活動の実習を通して、農村文化を継承・伝達するための仕組みを学生の目線で考えました。

回	テーマ	担当講師
1	オリエンテーション・イントロダクション	朝廣 和夫・長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)、野村 久子(九州大学大学院農学研究院)、小森 耕太(認定NPO法人山村塾)、武田 力(演出家、民俗芸能アーカイバー)
2	NPO法人山村塾での合宿研修 (農とアートのフィールドワーク)	朝廣 和夫・長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)、野村 久子(九州大学大学院農学研究院)、MUGAMBI Munene Mutuma・TRIMCHE Omar(J-MENA Project)、BENSAIDA Khaoula(九州大学国際戦略企画室)、小森 耕太(認定NPO法人山村塾)、武田 力(演出家、民俗芸能アーカイバー)、石田 絵里香(関西大学大学院)

対象者:芸術工学部２年以上、農学部、大学院芸術工学府全コース、大学院生物資源環境科学府　　**受講人数**:14名　　**日程**:2025年夏学期


唄って踊って味わう八女茶山参加者の集合写真


竹林作業の様子


エターナルコール作成中の様子



担当教員:
朝廣 和夫(あさひろ かずお)
九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門教授、博士(芸術工学)。専門は緑地保全学。九州芸術工科大学環境設計学科、大学院卒業。里地・里山保全の教育研究に従事。書籍『よみがえれ里山・里地・里海』などを共著。「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」を公開。



担当教員:
野村 久子(のむら ひさこ)
九州大学大学院農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター准教授、博士(学際)。英国・マンチェスター大学博士課程修了。専門は開発学、農業経済学、環境経済学。持続可能な資源の利用と管理、持続可能な農業の実践とその適応についてエビデンスに基づく政策評価や政策提言につながる研究を行う。

担当教員:
長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)
→ P82参照

Course 8

社会と多様性
〈学部：未来構想デザインコース１年〉

担 当 教 員：中村 美亜、長津 結一郎

多様で包摂的な社会をどのようにデザインしていくことができるかーこれは現代社会にとって切実な課題です。

2020～2025年度に開講された本授業では、主に「性」と「障害」に焦点をあて、マイノリティとマジョリティの境界に関する理解を深めることから、講義と演習を通して次の２点を検討しました。

①他人のことを自分ごととして捉えられるよう促すデザインとは？
②多様性と包摂性の両立を可能にするデザインとは？

回	テーマ（担当）	概要
1	イントロダクション	①授業ガイダンス　②多様性と包摂性…両立の難しさとデザインの役割　③多様性とデザイン…2020年に実施されたシンポジウムの録画（中島潤氏の「私たちの日常風景とデザイン」の部分）を視聴し、ディスカッション
2	ジェンダー	⓪前回の授業の振り返り　①ジェンダーの課題…本人の意思や努力では変えられない「性別」によって、選択の自由や機会が制限されている実態　②ジェンダーとは…解剖学・生理学的視点、狭義と広義のジェンダー、事前課題へのコメント　③演劇風ディベート「究極の選択」…企業の人事部の職員となり採用方針を議論
3	LGBTQ	⓪前回の振り返り　①LGBTQの基本…医学的概念と当事者視点の概念、セクシュアリティとアイデンティティ　②事前課題に関するディスカッション　③ジェンダー／セクシュアリティとアート（Living Together プロジェクト、The Clothesline など）
4	障害①イントロダクション	⓪アイスブレイク（シアターゲームを用いたワークショップ）　①障害をテーマにしたゲームの実践（幻聴妄想かるたなどを活用）　②障害は社会の側にある？障害の社会モデルに関するレクチャー
5	障害②障害とは何か	⓪前回の振り返り　①障害者権利条約、合理的配慮、障害の「社会モデル」の潮流　②障害のある人に対するマジョリティ側からの表象、「マジョリティ性の壁」　③ディスカッション
6	障害③障害を表現すること	⓪前回の振り返り　①障害×アートの事例（美術、音楽、映画等）　②障害×デザインに関する事例検討（ヘラルボニー、なんでそんなんプロジェクト等）　③ディスカッション
7	グループプロジェクト１	課題：来年度の「社会と多様性」受講生にむけて、この授業で目指す以下の目標に即した講義もしくは体験の機会を、10分間のプログラムにして考案、実施してください。①事前に考えてきた課題について各自の構想を共有　②グループで企画会議
8	グループプロジェクト２	①最終調整　②グループごとに実施　③講評

※備考

・授業構成は例年ほぼ共通ですが、詳細は年度により異なっていました。
・2025年度は教員の都合により、第１回に第４回の内容を実施し、第２～４回は本来の第１～３回を順次繰り下げました。



担当教員：
中村 美亜（なかむら みあ）
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門教授、博士（学術）。専門は文化政策・アートマネジメント研究。芸術が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する研究、またそれを踏まえたケア、社会包摂、評価に関する研究を行っている。訳書に『芸術文化の価値とは何か』、編著に『文化事業の評価ハンドブック』、単著に『音楽をひらく』など。日本評価学会認定評価士。

担当教員：
長津 結一郎（ながつ ゆういちろう）

→ P82参照